

梅毒診断時には HIV 抗原抗体検査を

琉球大学大学院医学研究科
感染症・呼吸器・消化器内科学講座 仲村 秀太



増加傾向が続いている梅毒の診断が今年に入ってから10月23日までに全国で1万人を超えたことが国立感染症研究所より発表され、一般紙に大きく取り上げられました¹。県内でも10月末までに97名の新規梅毒の報告があり、感染症法による全数把握となった1999年以降最多となったことが沖縄県より発表されました²。内科医だけでなく、皮膚科、婦人科そして眼科など多くの診療科で今後も梅毒を診断する頻度が増えるであろうことが予想されます。今回、読者の皆様にお伝えしたいことは、梅毒診断時に是非HIV抗原・抗体検査の提出を検討いただきたいという点です。

本県の2021年における人口10万人あたりの新規エイズ発症者は0.68名(全国ワースト1位)、新規HIV感染は1.09名(全国ワースト2位)で、引き続き県内でのHIV/AIDSの流行は厳しい状況にあります³。1年間に報告される新規報告数の中で、診断の遅れを意味するエイズ発症の割合が40%近くを占めている(全国平均30%、東京20%)ことも憂慮すべき事態です。早期診断の機会を逃さぬことが、この状況を打開する対応策の一つとして考えられます。

内藤ら⁴の報告によると2016年に新規報告された国内のPLWH(People Living With HIV)1,521名のうち、100名はHIVの診断前に梅毒と診断されているにも関わらず、梅毒診断時にHIV検査を医師から提案されたのはわずか17名(17%)であったことのことです。このような検査機会の逸失を無くすことは、診断の遅れや感染の拡大を防ぐと考えられます。

皆様の中には不慣れさから外来でのHIV検査提出に躊躇を感じる方もいらっしゃるかもしれませんが、梅毒などの性感染症があればHIV検査提出がレセプトで査定されることはありません。次に、提出すべき血液検査項目はHIV抗原・抗体検査と呼ばれるものです。現在、ほとんどの医療機関内ラボや外注検査会社がこれを使用していると思われそうですが、ご不明の場合は一度確認されるとよいかと思われます。もし、HIV抗原・抗体検査が陽性であれば、診断確定のために確認検査を提出することになります。

確認検査としてGeenius HIV1/2またはHIV-RNA定量(リアルタイムPCR)で陽性が確認できればHIV感染症として診断確定となります。確認検査に関しては、外注検査に委託することになるかと思いますが、この時点で県内に3つある拠点病院(琉球大学病院、県立中部病院、県立南部医療センター)に患者さんを紹介いただいても構わないかと思えます。

HIV抗原・抗体検査で陽性であっても偽陽性が0.1%程度出現するために、この時点では診断確定でないこと、確認検査を受ける必要があることをお伝えいただければと思います。

優れた抗HIV療法が確立されており、治療を軌道に乗せればパートナーにHIVを感染させるリスクはゼロであることや、仕事など日常生活と通院治療を両立できること、妊娠して子供を安全に授かることができること、医療費を補助する公的制度が利用できることをHIV検査前後で説明することで不安を軽減させることができるかと思えます。

性感染症の診断治療全般に言えることとして、相当な不安と勇気を抱えて外来にいらっしゃる方が多いかと思えます。安心して受診できる場を提供できるよう診療中配慮することが重要と考えます。

これまで HIV や梅毒の無料匿名検査の中心的な役割を担ってきた保健所は新型コロナウイルス感染症による業務逼迫によりその機能をかなり削がれる結果となってしまいました。沖縄県は外部委託という形で民間医療機関でのワンコイン（500円）HIV・梅毒匿名検査を11月より期間限定で展開しております。その趣旨に賛同し協力いただいている医療機関にはこの場で

感謝申し上げると同時に沖縄県に対しては、引き続き検査機会の場を必要な方に届くよう十分な対策を講じていただきたいと思います。HIVや梅毒検査外来設置に関して興味がありましたら、沖縄県ワクチン推進課あるいは琉球大学病院第一内科医局までお問い合わせください。

【文献】

1. <https://www.niid.go.jp/niid/ja/syphilis-m-3/syphilis-idwrs/7816-syphilis-data-20180105.html>
2. https://www.pref.okinawa.jp/site/hoken/vaccine/yobou/press/20221104_baidoku.html
3. <https://api-net.jfap.or.jp/status/japan/nenpo.html>
4. Naito T, et al. J Infect Chemother. 2022 Feb;28(2):333-335.

